

や 道 員 ほっ 鉄 ぽ

高倉 健

大竹しのぶ

広末涼子

吉岡秀隆

安藤政信

平田 満

中本 賢

板東英二

本田博太郎

石橋蓮司

志村けん

奈良岡朋子

田中好子

小林稔侍

雪の夜、やさしい奇蹟が舞い降りる。

一人娘を亡くした日も、
愛する妻を亡くした日も、
男は駅に立ち続けた…

原作／浅田次郎
直木賞受賞作(集英社刊)
監督／降旗康男

「鉄道員」製作委員会／東映 テレビ朝日 住友商事 集英社 日本出版販売 朝日新聞社 高倉プロモーション TOKYO FM 東北新社
製作／高岩淡 企画／坂上順 脚本／岩間芳樹 降旗康男 撮影／木村大作 音楽／国吉良一 配給／東映
協力／北海道 JR東日本 JR北海道 ジェイアール東日本企画 全国FM放送協議会 日本エアシステム 北海道南富良野町 アルファリゾート・トマム 雪印乳業





北の果て、小さな駅を守る男のもとへ、訪れるはずのない少女が、やってきた。



解説

■日本中を温かな涙と深い優しさで包み込んだ浅田次郎氏の短編小説『鉄道員』(第17回直木賞受賞)。幻想的な風景描写と、ひたむきで魅力的な登場人物と、ひたむきで愛と奇蹟の物語は、幅広い世代の共感を呼び、130万部を超える大ベストセラーとなった。99年6月いよいよその感動をスクリーンで味わうことができる。

■物語の舞台は北海道の雪深いさびれた町。とある小さな終着駅・幌舞で、2年前に亡くした妻と、わずかふた月で世を去り、生きていれば17歳、高校生だったはずの一人娘の面影を胸に抱いて、鉄道員としての人生をまっとうする駅長・佐藤乙松。この主人公を演じるのは、世界に誇る日本映画のスター高倉健。企画の段階から乙松役はこの人しかいないと言われていただけに、5年ぶりの映画出演とあいまって期待と注目を一身に集めている。また、長年乙松と連れ添ってきた妻・静枝役には、映画、テレビ、舞台と活躍著しい大竹しのぶ。永年の夢が叶って、ようやく授かった一人娘の死に直面する夫婦、という難しい役どころながら、2人は初共演とは思えないほど見事に息の合った演技を見せてくれる。そして、たった一人で駅を守り続ける乙松に一夜のやさしい夢を届ける少女を演じるのは、90年代を象徴するトップアイドルに成長した広末涼子。乙松の同僚で、釜焚き時代から共に人生を歩んできた親友でもある杉浦仙次役に

は、映画共演も数多く健さんと親交の深い小林稔侍。他にも安藤政信、吉岡秀隆、奈良岡朋子、田中好子。さらに本格的な映画出演はこれが初めてという志村けんなど、各世代を代表する豪華共演陣が名を連ねている。

■監督は名匠・降旗康男。撮影は木村大作。主演の高倉健と共に『駅STATION』(81年)『居酒屋兆治』(83年)『あ・つん』(89年)と数々のヒット作を世に送り出した彼らが、北海道の厳しい自然を詩情豊かに映像化。脚本は常に時代の淵に立つ人間ドラマを追い続ける岩間芳樹と、降旗監督が共同で担当。原作のイメージをそこなうことなく、乙松の人生にスケールをもたらした。また主題歌は奥田民生が作詞、坂本龍一が作曲を手がけ、坂本の愛娘・美雨が歌う。

は、映画共演も数多く健さんと親交の深い小林稔侍。他にも安藤政信、吉岡秀隆、奈良岡朋子、田中好子。さらに本格的な映画出演はこれが初めてという志村けんなど、各世代を代表する豪華共演陣が名を連ねている。

■北海道口では南富良野町、根室本線幾寅駅周辺に口ケセツトを築き、情豊かな幻の町、「幌舞」を創り出した。また、すでに現存していない気動車キハ12を映画のために復元、もう一つの主人公として味わい深い走りを見せるほか、鉄道ファンも魅了するD51も登場する。真冬の南富良野は連日マイナス20℃近くまで気温が下ががる厳しい自然条件だったにもかかわらず、出演者もスタッフも集中力と緊張感を切らすことなく全力を尽くし、まさに1999年という節目を飾るにふさわしい感動巨編を完成させた。



物語

北の果ての小さな終着駅で、不器用なまでにまっすぐに、鉄道員一筋の人生を送ってきた一人の男。一人娘を亡くした日も、愛する妻を亡くした日も、男は駅に立ち続けた。男の名は、佐藤乙松。今年で定年を迎える乙松は、彼と運命を共にするように廃線が決まった北海道のローカル線の駅長だった。駅を守り続けながらも、かつて愛する妻と幼い一人娘の命さえ守れなかった苦い悔恨は、乙松の心に深く宿っていた。降りしきる雪に汽車が何分遅れようとも、制帽を目深にかぶり、背すじを伸ばして、氷点下30℃近い極寒のフラットホームに立ち続ける乙松の姿は、まるで自分自身に厳しい罰を与えているかのような……

そんなある日、いつものように気動車を見送り、ホームの雪掻きをしていた乙松のもとへ、愛らしい少女がやって来る。見慣れない顔に、この町の子ではないなと思ふ乙松。「今年一年生になるの!」あどけない笑顔で話す少女の手には、時代遅れの人形が抱かれていた。二言三言の会話を残して風のように走り去ってゆく少女を、目を細めて見送る乙松。ありふれた日々、なげかない出来事のように思えたこの出会いこそ、孤独な乙松の人生に訪れた、やさしい奇蹟の始まりだった……

浅田次郎著(集英社刊)
全国書店で好評発売中
(定価1,575円税込)

プロデューサー/石川通生 進藤淳一 角田朝雄・木村純一 音楽/国吉良一 録音/紅谷恒一 照明/渡辺三雄 美術/福澤勝広 編集/西東清明 製作協力/小林酒造株式会社

'99年6月上旬より全国東映系公開
(全国共通特別鑑賞券1,500円 窓口1,800円の処)